

**表現テーマに向かって願いをもち、表現を深め、自分の思いをあらわそうとする子ども**

— 中学2年「くらしを彩る模様を考えよう」の実践から —

**1 題材のねらい**

くらしの中にある身近な美しい模様の効果を感じ、相手や場面を意識することを大切にしながら、はんこを用いた構成をいかし、その形や色、配置について話し合い、デザインをつくりだすことができる。

**2 授業の構想**

**(1) 子どものとらえについて**

次の文章は、本学年の学習の中で自分の魅力であると感じている一部分を描写したものを鑑賞する学習内容(図1)について書いたふりかえりである。

自分の描いた顔を人に見せるのは恥ずかしかったけど、鑑賞のときに、友達にまつ毛まで細かく描いてあってきれいだねと言われて嬉しかったです。グループの人の絵も、線に勢いがあったり指でこすった柔らかい肌にしていたりして、一人一人の雰囲気が出ていて面白かったです。(生徒A)

僕は右目を描きました。眼鏡が無くてB君だとわかって言われて嬉しかったです。だから、さらにまぶたの窪みとほくろも描き足しました。(生徒B)

この記述からも分かるように、生徒は顔が「似ている」か「似ていない」の判断基準ではなく、自分自身を見つめ、人との違いを認めたり、その中で表現のよさを讃えたりする姿が見て取れる。生徒Aは、奥二重から生えるまつ毛の構造を知るために何度も瞬きをして観察した。そして、細い毛の一本一本にも光が当たっていることに気付き、先を尖らせた消しゴムで消して光を表現するなど、表現の技能も高めていた。また、鑑賞者である生徒は鉛筆による表現の多様性を見つけ出すことができ、その人自身の特徴と結びつけている。そして、生徒がお互いに評価し合うことによって表現方法や取り組みのよさを認め合うことができた。自分の特長や魅力的な部分をいかに表現するかという点において、喜びを感じながら「もっとこうしたい。」という意欲を高めている様子が見受けられた。このように、手先の巧緻性など技術面の向上に焦点化するのではなく、自分らしい表現の追求を目指していきたいと考えた。

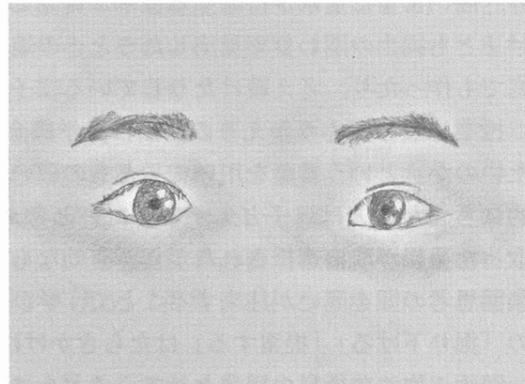


図1:「ワンポイント自画像を描こう」

本学年の生徒は、授業を内容によって個人とグループの活動に分けて進めてきた。今回のような制作の場合は、作品の根底となるアイデアを出したり自分と向き合ったりすることを個人で深め、制作段階での発想・構想に対する意見交換や制作時の助言、完成時の鑑賞会等をグループ活動で行ってきた。当初、生徒Bは眼鏡を焦点化して目元を描いていた。しかし、制作の途中で行ったグループ鑑賞の中で、友人から目そのものについて褒められたことにより、彼の作品が変化していくのである。それまであまり時間をかけていなかった目そのものが自身の特徴であるということを感じ返し、より細部まで観察することによって右目の周辺を一体として、自分らしさを表現すること

ができたのである。このように、特に制作時では自分がよいと思ったものでも、友達の何気ない一言や素朴な疑問によって立ち止まり、自分でも気づけなかったことに目を向ける契機となる。その末に作品に対する思いがより深まったり、考えが別の方向へと好転したりする。このようなかかわり合いの中で、学級全体やグループ、個人の学びを通して、自らの造形表現を追及して互いに高めあえるように授業を構想していきたいと考えた。

**(2) 本題材の内容と美術科で考える問いをもち追求する姿との関わりについて**

本題材は、相手に思いをあらわすための包装紙をつくり、その紙で贈り物を包むことを目的とした。包装紙には、消しゴムの版を用いて形や色を創意工夫した模様を押す。模様にはそれ自体で人を引き付ける魅力があり、見る人に何をあらわしているのか伝えるためのデザインでもある。例えば日本には、古くから手ぬぐいや風呂敷といった伝統的な美術作品ともいえる優れたものがある。これらは一つのパターンを繰り返し用いることによって構成される。したがって、はんこを素材にすることで繰り返し押すことが可能になり、それによって生まれる構成美を味わうことができる。そこには美しさや面白さがあり、デザインの基礎的な技能とも合致する。

本学校園図画工作・美術科として願う豊かな学びの一つに、「表現テーマに向かって願いをもち、自己の造形表現を高める姿」がある。そこで、子どもが自分の表現に自信をもち、相手とのかかわりの中で互いを認め合う姿を大切にしていきたい。さらに、確かな願いをもち発想や構想を見つめ直し、新たなアイデアを獲得しながら、よりよいデザインをつくりだそうとする姿も大切にしていきたい。かかわり合いの中で互いを高め合って制作したり、鑑賞したりすることができる子どもたちだからこそ、このような活動を取り入れることによって、「もっとよくしたい」、「よくするためには、どのようにしたらよいのか」という問いをもち追求するようになる。

そして、本題材では作品を完成させたその先に、相手へ思いをあらわすという目標がある。生徒はその相手を具体的に設定し、その相手に贈る物を包む包装紙を制作する。したがって、生徒は家族や友人などの性格や好きなもの、相手との思い出を想起するなどして思いを明確にしていく。「作品は自分の分身」という考えに立って作品を鑑賞するとき、鑑賞を通して自己の表出、あるいは認知をすることができる。自分や仲間の表現と向き合うことで、他者とのかかわり合いの中で感性を働かせ、以後の造形表現を広げることが期待できる。

**(3) 本題材の内容における問いをもち追求する姿を育成するための具体的な手立て等について**

日本には、物を包装紙で丁寧に包んだり手紙を封筒に入れていたりして、相手にしか中身が分からないようにする心の文化とも言える風習がある。包装紙や封筒は相手に物を贈る際に、思いがより伝わるような手助けとなるものである。導入時では、生徒が持ち寄った包装紙をグループや学級で分類し、規則性や特徴をまとめ、その美しさを味わう。また、「配色の工夫」や「構成美の要素」などについて、効果や美しさを感じ取れるように模様の資料を多数提示する。そして、思いをあらわしたい相手を意識し、「父への誕生日プレゼントである本をラッピングしたい」や「転校した親友へ手紙を書きたい」など、「誰に、どのような思い」を伝えたいのか、そしてその思いを「どのような場面で、何で、どうやって」あらわすのかをワークシートを用いて願いを明らかにする。

次に、つくったはんこを押しながら説明したり相手のものを押したりして、4~5人のグループでの話し合い活動をする。そこで改めて表現テーマを照らし合わせることによって、子どもたちが自分の思いに沿った作品をつくるためにはどうすればいいのかという問いをもつことが期待できる。つくったものをさらに工夫していいものにしたいという願いをもって互いに見合うことで、自分や友達が何をあらわしたいのかを知り、よりよい表現方法を明らかにすることができる。教師のはたらきかけとして、子ども同士がかかわり合いの中で「子どものしたいことは何か」、「本当にそれでいいのか」といった問い直しや、「なぜそうなったのか」という子どもの考えを掘り下げていく

はたらきかけを行う。また、問いに向き合い、どのようにしたいのか提案するはたらきかけを行う。自分の考えと向き合うことで問いが明確になり、作品制作に対する意欲を高める姿が期待できる。

作品完成後に鑑賞会を行い、作品について、「特にここを見てほしい」という創意工夫した点や努力したことなどをグループのメンバーに紹介し、互いの作品に対する感想などをメッセージとして贈り合う。友達の仕事のよさを味わい、互いを認め、讃え合えるような姿勢を育てていきたい。そして、「もっとよくしたい」や「学んだことをいかして、次はあんなこともしてみたい」といったさらなる願いをもち、造形表現を熱心に取り組み追求しようとする子どもの姿が期待できる。

また、授業中に生徒は疑問をもつと「どの色がおすすめですか。」などと教員に質問をすることがある。そこで生徒に理由を聞くと「なんとなく。」や「ふつうに考えて。」といった安易な言葉で片付けてしまうことが少なくない。だからといって生徒が求めるような返答を直接的にすると、指導者としての意図が加わってしまい、生徒の豊かな発想・構想の妨げになることがあり、自ら追求する姿勢そのものや、そこから得られる作品のよさが損なわれてしまう恐れがある。そこで、個人での思考を深めるために、教師側から「なぜそう思うの。」と問い返すことで、根拠や理由を伴う意見のよさを認め、考えを整理することで意図が明確になっていく。そのために、生徒個人だけでなく班や学級全体でかかわり合い、意見を共有する場を多く設定する。子どもの願いに応じながら学級全体に広げたり、個の追及に返したりする。特に、作品の途中段階で感想や助言を交わす際には、発表者に対して感じたことを伝え合うことによって、感じ方の違いや表現の広がり気付き、自分の作品にいかす取組につながることを期待できる。

### 3 展開計画 (全9時間)

次	主な学習	時	具体的な学習・内容
1	さまざまな模様を味わおう。	1	・色相環や色の効果、配色の工夫を確認し、資料をもとにさまざまな模様を知る。 ・持ち寄った包装紙を見てグループで話し合い、模様には様々な形や色、連続や規則的なもの、不規則なものなどがあり、構成されていることを理解する。
	思いをあらわすための模様を考えよう。	2	・ワークシートを用いて、思いを明らかにする。 ・模様は単純な形であっても、色や配置で変化に富んだ制作ができることを確認する。
	くらしを彩る模様をつくろう。	3・4	・消しゴムやデザインカッターの特徴と使い方を理解し、はんこを削る。 ・はんこの形が整うまで、スケッチブックに黒インク一色で試し押しを繰り返す。 ・あらわしたい思いやはんこの形を踏まえて、スケッチブックに無彩色・有彩色の18色スタンプインクを用いて構成する。
2	作品をよくする工夫をしよう。	5~7	・グループ(4~5人)であらわしたい思いやはんこの形を踏まえて、色や構成について話し合ったり、実際に押ししたりする。 ・グループ鑑賞をもとに、はんこの色や形をいかした配置を考えながらスケッチブック見開きの両面に押し作品を制作する。
3	包装しよう。	8	・スケッチブック見開きのどちらかを選び、思いをあらわすものに美しく包装する。 ・新たな考えや迷いが生じたときは、グループで相談しながら制作する。
4	作品を味わおう。	9	・完成作品について誰に対するどのような思いをあらわしたのかを中心に発表する。 ・グループ(4~5人)でお互いの作品に対する感想などをふせんに書き、メッセージとして贈り合う。 ・制作を振り返り、ワークシートにまとめる。

### 4 授業の実際

次のふりかえりは、題材のまとめに書いたものである。

今まで私はプレゼントの中身ばかりに気をとられて、まわりのラッピングをじっくりと見たことがありませんでした。でも今回の作品をつくって、中身だけでなく、相手がどうしたら喜んでくれるのかをずっと考えてきました。包装紙は「つくった人が何を伝えるか」や「どういうイベントで何の情報を伝えられるか」という人の思いが込められたとても素敵なものだと思います。私も友達のアドバイスのおかげで素敵なものができました。(生徒C)

生徒Cは、相手へ思いをあらわしたいという強い願いをもって制作に取り組んできた。その際に、自分の願いや相手への思いを何度も確認し、はんこの形や色について友達と話し合ってきた。ふりかえりの内容にもあるように、生徒Cにとって他者から受ける助言は自身の刺激となり、よりよい表現にするための必要不可欠なものであることが読み取れる。本題材では、グループ活動の場を多く設定することにより、生徒達は作品を見たり話し合ったりすることで表現をより深めていった。さらに、その活動が充実したものとなるように、教師による子どもへの「なぜ?本当にそうなの?」という問い直しや「どうしてそう思うの?」という考えを掘り下げていく働きかけをするように努めた。具体的な内容を次に挙げる。

#### (1) 思いをあらわすための模様を考えよう。(第1次)

生徒は、これまで学習してきた色相環や色の効果、配色の工夫を確認した上で、各々が持ち寄った包装紙をもとに模様には様々な形や色、連続や規則的・不規則なものなどがあり、構成されていることを理解した。そして、その知識を自分の思いをあらわしたい相手にどのような包装紙が相応しいのかを考える判断材料とした。そして、ワークシート(図2)を用いて、模様の元となるはんこがなぜその形や色、構成なのかという意図を明確にし、思いをあらわす相手を意識した表現をするようにした。さらに、削っている途中段階のはんこを(生徒が互いに)見て周る場を設定することにより、学級の進捗状況を把握するだけでなく、相手の素敵などところを認め合ったり自分の作品に取り入れたりすることができる手立てとした。

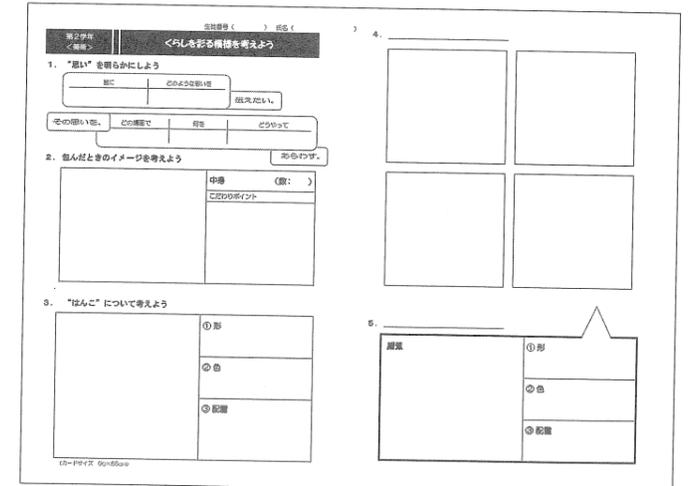


図2: ワークシート

#### (2) 作品をよくする工夫をしよう。(第2次)



図3: 自分の作品を説明している様子

はんこを用いて思いをあらわすために、相手や場面を意識して表現する活動において、デザインの構成美をいかした模様の形や色、配置などをグループや学級全体で話し合い、試行錯誤する場面を設定した(図3)。

次は、生徒Cのアイデア段階の作品(図5)について、グループ活動で話し合ったときの記録である。

生徒C：これは、お父さんへ感謝の気持ちを伝えるために、誕生日に渡す本をラッピングする包装紙です。  
 生徒D：きれいだね。お父さん？  
 生徒C：うん、お父さん。もうすぐ誕生日だから。  
 生徒F：どうして青色なの？なんか、寒そう。  
 生徒E：あーわかるわかる。さむ〜って感じ。でも、青いからかな、クールな感じ。  
 生徒F：ちょっと冷たいかなー。  
 生徒C：お父さんが、青好きだから。  
 生徒D：好きなんだ。でも、確かに冷たい感じするね。  
 T 1：どんな気持ちを伝えるんだって？  
 生徒C：感謝をあらわしたいけれど、なんか違う気がしてきました。

このように、生徒Cは父親を象徴する色として、父親本人の好きな色を選んでいく。しかし、友達から色の印象やその効果を聞き、迷いが生じている。そこで教師(T1)による問い直しにより、本来の目的である感謝の気持ちを表すということを確認し、色について考え直すことができていく。その後、グループで話し合いながら、色やはんこの配置について試行錯誤をした(図4、図6)。その結果、暖色系を混ぜながらも青色をアクセントとした押し方を考えることができた(図7)。この授業のまとめの際に、生徒Cに学級全体に向けてグループ活動での話し合いの流れと、作品の変化について発表させた。そのことにより、思いをあらわすためにはどうしたらよいかという問いが深まり、それぞれのグループや個人でデザインのさらなる追求をすることができた。つまり、はんこを用いた構成について話し合ったり試したりすることにより、グループで制作意図や思いを共有し、形や色、配置、包んだ時の見え方などの発想を広げたり深めたりしてこれからの自分の作品づくりにいかすことができたのである。そして、この話し合いの設定はこれまでの学習と関連付けた有意義な活動となったため、相手への思いがよりあらわせるような構成の発想を広げたり深めたりすることができた有意義な活動となったため、よりよいデザインをつくりだすことに有効であったと言える。



図4：友だちのはんこを使って試し押しする様子

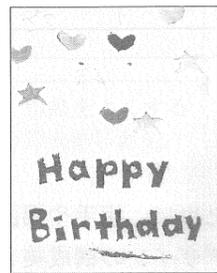


図5：アイデアの段階



図6：グループ活動での途中経過

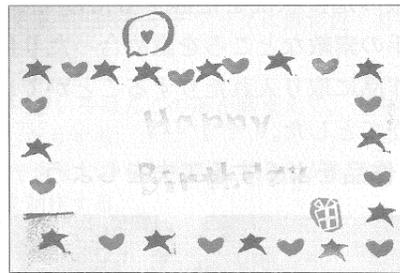


図7：話し合いによって変化した作品

### (3) 包装しよう(第3次)

第3次では、はんこを押したスケッチブックをちぎり取り、思いをあらわすものを美しく包装する活動を行った。生徒によって包む中身は様々で、相手に応じたものとなっている。そのため、大きさや形態、包み方などは多岐にわたる。その際に、改めて「誰に、どのような思い」を伝えたい

のか、そしてその思いを「どのような場面で、何で、どうやって」あらわすのかをまとめたワークシートを確認し、渡したときの相手の顔を思い浮かべながら包装できるようにはたらきかけた。生徒は相手の喜ぶ顔を思い浮かべながら丁寧に紙を折っていき、よりよい包装となるようお互いの作品に対して助言をしながら成形していった。このときのグループは、第1次から共に活動してきた班員のため、お互いの思いをあらわす相手やその意図も把握していることから、折り方や模様の見せ方など細部にわたって意見を交換したり認め合ったりすることができた。「もっとよくしたい」、「相手に喜んでもらうためには、どのようにしたらよいか」という視点から、はんこを押し加えたり、見えない位置にセロハンテープを貼ったりして工夫をする姿が見受けられた。これらのことから、題材を通して目的意識を明確にすること、かかわり合いによる話し合い活動を通すことによって、問いをもち追求できるようになると言えるのではないだろうか。

### 5 おわりに

生徒が問いをもち、追求する姿を表出するために、グループ活動の場の設定や教師による言葉かけを意識的に行った。また、思いをあらわす相手を明確にすることで、子どもは各々の必要感のもと、模様の形や色、配置にまで細かくこだわって熱心に制作した。さらに、グループ活動ではお互いの作品への助言が活発になり、思いをあらわしたい相手に相応しくなるように、そのイメージ像を細かく分析したり、受け取ったときの反応や心情まで想像したりすることができた。そのため、鑑賞の際にも曖昧な言葉ではなく、発表者も鑑賞者も渡す相手や場面をイメージしながら意見交換をすることができた。

題材の設定時には、「●▲■」や直線、曲線といった単純な形態から生まれる形の構成、重なり、色による効果や変化を想定していた。しかし、生徒の抱く「はんこ」のイメージが「氏名印」やプリント返却時に教師が押す「よくできました」の浸透印といった、複雑な形でも繰り返し押せるというものであった。そのため、生徒の考える模様が「★♪」などの記号や「HAPPY BIRTHDAY」といった文字、「人の顔」などのイラストといった直接的で複雑な形となるが多かった(図8)。これは、相手への思いをより伝えたいという意識が働いたためではないかと考える。生徒は、これまでの学習において、美術やデザインにおける社会での役割や効果として、レタリングやポスター制作など、どのような工夫をしたら視覚的に伝わったり判断したりしやすいものになるのかということを学んできている。そういった学習の背景と、導入時での作品の共有イメージの不十分さが原因だと考えられる。また、生徒の中には大切な存在という意味合いで、思いをあらわす相手に「頑張っている自分へのご褒美」や「いつも自分を励ましてくれる犬」といったものを設定するものもいた。これらの場合、グループ活動での意見交換の際に、助言が難しいという状況があった。したがって、今後さらに、生徒が問いをもち追求する姿を目指していくための題材や教具、ワークシートなどの開発、適切な子どもにとらえ、指導・支援の工夫が必要であると感じた。

(文責 加藤 舞)

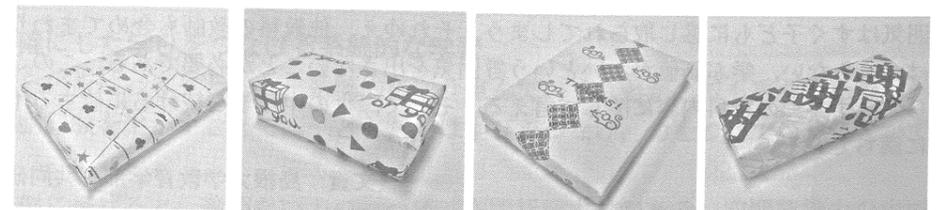


図8：完成作品と、包装したもの